授業の玉手箱

ことばは生きている

夫　明美

授業を運営するにあたり、先生方は多くの時間とエネルギーを教材研究に割かれていると思われます。生徒・学生の興味や関心を引くために教科書で扱われているトピックをどのように導入するかは、その後の授業展開のカギを握る重要なポイントでしょう。本稿では2007年発行のNew Crown [1] の4章「Pūnana Leo（直訳すると『声の巣』）に関連して、ハワイで行われている言語保持活動について紹介したいと思います。

当該箇所ではハワイ出身のALT教師Kalei Kealoha氏が自分の出身地であるハワイについて紹介しています。地理的な位置や民族構成の紹介に続いて、英語の占める社会的な役割と位置づけ、そしてハワイ州ではもう一つの公用語と制定されている「ハワイ語」へと話は展開していきます。1970年代に盛んになった「Pūnana Leo」の活動内容が紹介されて、言語が歴史や文化を映す鏡であること、人間のアイデンティティであることについて考えさせます。日本では「みなが日本語を話す」ことが当たり前のように思われているので、言語が危機に瀕することや言語が滅んでいくことについてテキストと関連付けて話すことは新たな学習になると同時に、環境保護などと同様にグローバル社会に伴う変化についても考える契機となると思われます。

私は2011年2月にハワイ大学マノア校（オアフ島）で開催されたInternational Conference on Language Documentation and Conservationという学会に参加しました。その学会のプログラムの一部で、ハワイ大学ヒロ校（ハワイ）がホストとなり、同じハワイ島にあるNāwahīokalaniōpūuという幼稚園から高校までハワイ語のイマージョン教育を行っている学校を見学する機会を得ました。授業見学では、小学校低学年の子どもたちが私たちにゲストにも分かるレベルのハワイ語で「自分の名前・自分の住んでいる場所」をハワイ語で自己紹介してくれました。中学生の授業ではハワイ語でアメリカ文学史のイントロレベルを学んでいました。

写真①イム：非常に大きく、大人数分の料理にも対応

写真②豚小屋「豚に触ったり餌を与えないでください」と表示

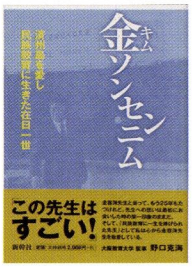
授業外で特に印象的だったのは、校舎の裏手に大きな庭園、農場、イム（ハワイ式の大きな囲炉裏：写真①）、豚小屋（写真②）があったことです。管理責任者の方、同校出身のホスト大学生の案内によれば、この学校では言葉を教育するだけでなく、昔のハワイ人たちの生活様式やそこに投影される社会文化的な価値観も教育を通して受け継いでいくことを大事にしているということでした。日本での「いのちの教育」ではありませんが、年に1度は飼育した豚をさばいたのち、イムで料理し、ハワイ式のパーティ「ルアウ」も開催されるとのことです。「言語は話者や民族のアイデンティティだと認識し、尊重すること」や「ことばにこめられている社会文化的な価値観を世代を超えてどのように継承していくか」は、言語が言語として生き抜いていくために非常に大切なことです。この側面を生活行動の教育を通してまさに「イマージョン」していることに非常に感銘を受けました。

今回ご紹介した言語保持活動は最も成功した例の一つで、どのような環境でもすぐに実行可能なケースではないかと思われますが、言語の多様性を享受する態度を育むきっかけとしてご参考になればと思います。蛇足ながら、本稿のタイトルは筆者が大学生のころに読んで研究者を志すきっかけとなった1冊です。今回参加した学会や学校見学の間に何度も何度もこのフレーズが頭をよぎりました。それと同時に、ことばにこめられる社会文化的な背景についても深い洞察力をもてる教員養成に一層励まねば、という思いを強くしました。

書籍紹介

『金ソンセンニム－済州島を愛し、民族教育に生きた在日一世』

イルムの会（編）（2011）新幹社 2,100円



本書で自らのこれまでを語る金容海氏は、本学からほど遠くない場所にある大阪市立北鶴橋小学校で、大阪府で最初の民族講師として36年の長い間在日韓国・朝鮮人児童の教育に携わり、「北鶴橋小学校を卒業するのは一体誰なのか。本名の実態ある児童なのか、それとも通称名の虚像なのか。朝鮮人児童が朝鮮人として誇らしく勧めるよう」との思いから民族教育の根幹として「本名を名のる」取り組みを進めた。氏の人柄に心酔する大阪府立高校の某校長の口癖は「金先生は大阪の在日の歴史の最後の語り部」であるが、本書は氏を父として慕う人々が、教育を中心とした氏の幅広い活躍の歴史を記録に遺すため出版されたものである。本書の出版記念の会で参会者へのお礼の挨拶に立たれた氏は、自らの信念と生き方を力強い声で参会者に語りかけられたが、84歳の高齢にもかかわらぬその姿はSamuel Ulmanの「Youth」の一節を彷彿とさせるものであった。

Youth is not a time of life; it is a state of mind;.. it is a matter of the will, a quality of the imagination, a vigor of the emotions; it is the freshness of the deep springs of life....

大阪府における在日韓国・朝鮮人教育の歴史に触れる貴重な一冊である。

（中垣　芳隆）

編集後記・第10回勉強会（案内）

イタリアの名門サッカークラブ、インテル・ミラノに所属する長友佑都の「目指す場所がどんなに遠く離れていても這い上がっていくしかない。レベルの高い環境に身を置いているのだから、ギャップを感じるのは当然だ」という言葉に惹かれた。教育者は常に高いところをめざしていかなければならない。未だに困難な生活を強いられておられる東日本の被災者の人々に思いを馳せて。（ひ）

第10回勉強会予定
平成23年7月16日（土）

大阪府立阿倍野高校の喜多千穂先生に、これまで出会った生徒にどう向き合い授業を実践してこられたかを、個別の指導法や一授業の流れに特化した発表ではなく、28年という先生の英語教員生活において、初任者の頃や中堅の頃の授業で折々考えられた工夫や苦労などとともにお話し願い、一過的でも持続的でもある「明日への英語授業」を模索する英語教師の進むべき道を探る。

大阪女学院大学・大阪女学院短期大学
教員養成センター Teacher-training Center
540-0004　大阪市中央区玉造2丁目26番54号
Tel: 06-6761-9371　Fax: 06-6761-9373
Homepage: http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/ttc
e-mail: ttc@wilmina.ac.jp